お正月

篠田純子

白き鷹据ゑて妙齢なる鷹匠
その中に言ふこと聞かぬ鷹のをり
獅子舞や「終はり無き世」と笛太鼓
ばんぱくと煩悩たぶる獅子頭
初金比羅ベビーカステラ屋の饒舌
無言なる乗り鉄父子（おやこ）初景色
千鳥足の爺を支へる孫新春
丈高き山茶花のもとアマンド色
人日の落札ハンマーやや強め

熟年家族

篠田大佳

熟年家族節も雑煮も各々に
元日の夜「地震が治つたらまた遊べる？」
二日かな喃語にこにこ「だーいすき」
三日にしてニュースもやつと寝正月
四日はや酒瓶奢侈な塵置場
雪に瓦礫ＡＩであらまほし
銀座みな傘をささずに時雨受け
春来しと梅は定めて寒に咲く

新年

須賀敏子

元日に震度７とは能登半島
被災地の能登に寒波の予報あり
初詣藁で作りし竜見上げ
宝船うっかり夢を忘れけり
初電車七福神の川越へ
初雪や泥にまみれてラガーマン
くたくたの面取り大根柚子の味噌

雑詠

都築繁子

初詣拝殿までの長き列
参道の屋台の匂い暖かし
日めくりの格言楽し柚子香る
良き目覚め枕の下の宝船
不忍の蓮は枯れ色雨模様
露天湯に暫し揺蕩う冬青空
露天湯や枯れ木の間より青き空

令和六年

長崎桂子

初明り庭の手水もいただけり
娘と歩む日は燦燦と初祓
年始め災害の列島に泪
テレビ「生きる」見る風習に泪の年始
初雪や一着おほく身にまとふ
日差しくる老も若きも大喜び
かぐはしくけなげに開花寒あやめ
積雪九センチ降りつづく朝あける
日差し来るドドオンと落つる屋根の雪
伊勢の宮混雑をさけ初詣

カリフォルニア雑詠　森なほ子

年の瀬やシスコ急坂見上げをり
息切らし暮れのシスコの坂に立つ
鈴なりの電車陽気に冬日燦
大学に聳ゆる古塔冬青空
年新た無人キャンパス走る栗鼠
初日影キャンパスに木々瑞々し
正月もあつけらかんとハンバーガー
初凪や鯨吹く汐遠く見て
外国に故国の地震を見て寒し
門松とおせちの国へ飛ぶ虚空

寒　赤座典子

初旅や耀く富士に出会ひつつ
年玉に始まる集ひあと幾歳
元日や曽遊の地に大地震
何事も無かりしやうな寒日和
読むことを怠るまいと去年今年
もろもろの気弱を宥む風邪の日々
総立ちで送られ敗者冬日没る
「かわいい」にも「しっかり」にも飽くイヤーマフ
白菜漬の樽干されゐる四温晴
四温かな薬局常より込み合へり

寒旱

秋川泉

元日の地震の長きに天仰ぐ
感冒に籠もるひと日の永かりし
初夢の大きな野望打ち捨てぬ
初夢の香ぐはし鳥と目の合うて
豆乳とフェイスマスクと寒旱
冬の雨インプラントと頬の腫れ
尼寺を訪ふ道に冬の月
猫二匹にらみ動かぬ寒の月
寒風の道行く眦を決し
冬のサスペンスあと２ページで完

地震

七郎衛門吉保

和洋中迷って買はず寝正月
初夢を見る前に地震悪夢かな
宝船止まずの地震に帆を下ろす
三日朝駅伝と逆箱根入り
初晴の十国峠裾広し
輪島塗天下一品も冬の灰
珠洲の七輪窯の崩れて寒威
水断たれ助っ人も断つ能登氷雨
昭和寒し目白の災と八代亜紀
昨日三つ今朝は五つの寒紅梅

烝収集

佐藤　竹僊
秋川　泉
七郎衛門吉保
篠田純子
篠田大佳

須賀敏子
都築繁子
長崎桂子
森なほ子
赤座典子

喜孝抄

一月号作品より

篠田大佳・森なほ子・佐藤喜孝

父母も子もおろかにてむかご落つ　佐藤竹僊

平仮名の「おろか」に二つの文字があることを知りました。「愚か」と「疎か」です。この句、どちらなのか？「疎か」、大雑把、いい加減の方を取りたい。或いは作者はどちらの意味も込めておられるかもしれない。熟したむかごはポロポロ落ちて疎らになりやすい。この世に子孫を残すということを、むかごに託して淡々と詠んでおられます。（なほ子）

提灯の裡に入りて秋夕日　佐藤竹僊

狭いところが何故か好きで潜り込み、提灯の裏側を見て、常識の裏側を楽しんだりしているうちに、夕暮れになった景を想像します。秋は日の沈むのが早いと感じる季節ですので、余程夢中だったのでしょう。少年の頃の記憶を呼び覚ます。（大佳）

御会式の鉦や太鼓に子が跳ねる　秋川　泉

御会式は仏教の行事で、法会の儀式（死者を供養する儀式）のことで、江戸時代ごろから、日蓮宗の開祖日蓮の正忌日（命日と同じ意味）の一〇月一三日を指すようになったと辞書にあります。要するに厳かな儀式であり、儀式の進行をじっと我慢している子どもが、打楽器のような仏具の

音色にびっくりしたか、リズムに乗っているのか。落ち着かない子どもの姿が浮かびます。（大佳）

うかうかと梅檀草につかまりぬ　秋川　泉

梅檀草を〝センダンサウ〟と読んでゐたが、センダングサと読むらしい。雑草で、生命力・繁殖力が強いといふ。梅檀草の実は動物などに付着する俗にいふ〝ひっつき虫〟。泉さんも動物の一種らしく梅檀草に捕まってしまったらしい。そのことを泉さんはもちろん嫌ってゐるのではなく、むしろ「うかうかと」に遊び心がみえ楽しんでをられるのだ。（喜孝）

冬句会「空や」の餡の頭に甘味　七郎衛門吉保

あをやぎ句会のお茶受けに出た、ぎんざ空也の最中を隅々まで味わっている句と想像します。作者は細かいところまで神経を光らせて、甘味を発見しています。ぎんざ空也の最中は購入予約が必要ですが、電話が繋がりにくくなっているので、ますます希少な菓子になっています。大事に食べていただいてありがとうございます。（大佳）

秋の空サイダーのごと嘘はなく　七郎衛門吉保

私に似たやうな句があるとおもひ、この句に親しみを覚えた。調べたら、サイダーではなく、ソーダ水の句だった。「少年と少女のウソにソーダ水」。吉保さんの句は「嘘はなく」と。私は嘘をつ

いてゐる。吉保さんの心の素直さがこの句の晴れ渡った「秋の空」です。サイダーの泡は、あくまでも垂直に天を目指して昇ります。陸続と剛直に。直喩ではない表現に吉保さんの俳句への強い関心の一端を伺ふことができました。（喜孝）

落ちゐたる蝶の片羽掃く晩秋　　篠田純子

蝶の片羽が落ちているところを見つけ、さっと掃く様子が描かれています。蝶が片羽を落とすほど痛切な出来事を認識しながら、そこには目もくれず自分の仕事を全うする作者がいて、人々に語られない物語を見つけ、俳句として語る作者もいます。そこに、世の不条理に整理をつけている作者の姿を見ます。（大佳）

小灰蝶の卵さぞかし小さからむ　　篠田純子

〝しじみ蝶〟を「蜆蝶」とも「小灰蝶」とも漢字で表記する。蜆町は翅の模様と蜆の殻の模様からと納得だが「小灰蝶」は凝った書き方だ。「小灰蝶」は灰のかけらが舞ってゐるやうに見えたといふことからきてゐるとのこと。灰の欠片とは詩情の欠片もないし、しじみ蝶に礼を失するといふもの。

紋白蝶の四半分ほどの翅の大きさしかないこの蝶の卵に想像をめぐらせる純子さん。小さいものはいとほいもの。漱石のすみれの俳句を思った。（喜孝）

氷雨となり子の老い様を見届ける　　篠田大佳

この句、一見して文字通りに受け取るのは難しくはないのですが、その真意はわからない。「氷雨」が冷たくて、親が我が子の行く末（ではなく老い様だが）を心配しているようには見えない。また、老い様という言葉も厳しい。我が子の行く末が気にならない親などないと思いますが……。先の佐藤先生のむかごの句とつい比べてしまった。親の心子知らず、か。（なほ子）

§

長寿の国になったものだ。この俳句は長寿の人でないと感じられぬおもひかもしれません。「子の老い様」を子の挙動から垣間見えたり、ある時ふと感じた、といふことではなく「見届ける」に重みがある。凄さがある。この凄さは「氷雨となり」に繋がる。（喜孝）

句座果てて銀座の街は時雨けり　　須賀敏子

銀座での句会、帰り道を歩く作者に時雨が降っています。時雨の心情は物悲しい様子を表します。今、銀座の街ではビルの建て替えが増えています。更地が多く、ぽっかり穴が空いたようで、人の営みが停滞している印象を受けます。そんな街の雰囲気を読みました。（大佳）

§

句会を終へたあとの心地よい疲れと、昂ぶったこころをいだいて句会場を出る。そこは銀座、「時雨」に出合ひそのまま五七五が浮び、書き留めた。（喜孝）

丸の内場違ひなれど秋うららら　　都築繁子

「場違ひ」、よく分かります。私も昨秋用があって何年ぶりかで丸の内を歩きましたので。日中の丸の内、たまに行き交う人々はバリっとしたビジネスマンとビジネスウーマン。ぶらぶら歩いている老人など皆無です。それでも「秋うららら」を楽しむ余裕の繁子さんです。（なほ子）

§

「場違ひ」は繁子さんがおもふ季語の「秋うららら」と丸の内ビル街とにズレを生じたからであらう。ズレを感じたもの。しかしそれを越えての丸の内のビル街に「秋うららら」だなあとおもはれての一句である。（喜孝）

報恩講野菜こんにゃく煮しめをり　　長崎桂子

報恩講は親鸞上人の忌で全国で一週間に渡る法要が盛大に行われる。私は宗教関係の季語に弱いので、勉強になりました。作者が門徒であるかどうかは別として、そんな日に煮しめを作っておられる作者になんとも言えない親しみを感じました。「煮しめをり」という進行形に煮しめの匂いが漂って来ます。（なほ子）

風伝おろしと言ふ御浜町暮秋　　長崎桂子

御浜町を美浜町と誤入力してしまった。〝風伝おろし〟とは「御浜町の秋から春にかけての風物詩。山の向うで発生した霧が風によって山の谷間の風伝峠を越え、風のまま山肌を流れ落ちる、これを風伝おろしという。」とのこと。動画で見ることができた。まこと幻想的であった。ぜひ機会があれば御浜町で見てみたいとおもった。むずかしいが五七五で動画の風景を再現出来たらなあともおもった。（喜孝）

草枯れて津波知る人海を見る　　森なほ子

津波というと、二〇一一年の東日本大震災の津波を想起して、春の津波から草枯れまでの年月の経過を思います。「津波を知る人」が海を見ることで語ること、語らないこと、さまざまあると思います。その記憶と想いというものに深く潜り込まずに、敢えて光景を描くことで、体験者の気持ちを尊重している作者の心配りも句から見えます。（大佳）

駅弁の酸の香車窓の冬日差し　　森なほ子

旅の楽しみのひとつである駅弁を膝の上で紐解く。弁当からたちのぼる香。「酢の香」はこの句の眼目。冬日といへど暖房の効いた暖かい車内での「酢の香」。人それぞれに「酢の香」へのおもひがあるが、私にはなぜか懐かしい光景が浮んでくる。何気ない「酸の香」がおもしろい。（喜孝）

煮凝や理不尽不条理渦巻きて　　赤座典子

冬の朝に、煮魚の汁が固まった煮凝りを見ることは殆どなくなった。（我が家だけ？）煮凝りには魚の皮や魚卵などが混ざって一緒に凝固していて、私は好きでした。作者は一塊の煮凝りに、今のこの世界を見た。この理不尽で不条理に満ちた世界を。（なほ子）

鳥を飼ふ普通の暮し冬の雨　　赤座典子

「普通の暮し」に立ち止まる。「普通の暮し」とはどんな暮しであらうか。きっと典子さんが考へてゐる〝普通でない暮し〟とは、災害に遭ひ、仮設住宅生活を余儀なくされてゐる人。体を壊し病院暮らしを……。まだまだいくらでもおもひつく。「普通」の基準はあるやうで無いが、無いやうであるかも。鳥籠には鳥が鳴いてゐる生活を「普通の暮し」とおもった。普通の暮しから今こぼれてゐる人を思っての「冬の雨」か。そのあたりの心の揺れをうかがはせる季語である。（喜孝）